

---

# ドラゴンセイバー ~アレクの冒険

ガラクタ・エントツ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドラゴンセイバー～アレクの冒険

### 【Zコード】

Z7950Z

### 【作者名】

ガラクタ・エントツ

### 【あらすじ】

アレクが旅の途中に訪れた街道の街フェズ。2ヶ月ほど前から近くの山にドラゴンが住みつき、街は領主がドラゴン退治に出たという話で盛り上がっていた。

昔懐かしい、古典的なファンタジーです。

ブルターニュ地方南部、アルムス山脈の東端に位置する街道の町、フェズ。

レオンは、古代ローマ人が侵入した際に作った街が起源とされている。街中にこそ古代の面影は残っていないが、街の周囲を囲む城壁や、街に引かれた上下水道にその面影を見ることができる。川の合流地点にあり、古代から地方におけるちょっととした交通の要所だった。そのため、街には市を開けるよう広場があり、近くの丘の上には領主の館がある。

日も暮れて、夜を迎えた街の酒場にアレクはいた。

「いや！ やめてください！」

一日の仕事を終えた人たちが集い、酒を酌み交わす人々で賑わいを見せる酒場に、若い女性の悲鳴が響き渡った。

「いいじやねえかよ、へるもんじやねえしよお

卑下た笑いを浮かべた大柄な男が、給仕の娘の手を無理矢理引っ張ろうとしていた。

ならず者が町の有力者の息子なのだろうか。

店内の客はあるか、店の主人ですら、男の横暴ぶりに見て見ぬ振りを決め込んでいる。関われば、口クなことが無いというのは、周知の事実なのだろう。

誰も、自分がかわいい。余計な厄介ごとなど、ご免被りたい。しかし……

ガタアン

不意に、店の端で椅子を蹴上げる音が響く。

唖然となる店内。乱れた服を押さえ、うずくまる給仕の娘。

そして、男の前に立つ、旅人らしき見慣れぬ少年の姿。

黒髪と、黒い瞳を持った少年。分厚い外套を身に纏い、傍らには

使い込んだ長剣を携えている。顔には、まだ幼さを端々に残しているが、強い信念を内に秘めた表情が、彼に凛とした雰囲気を与えていた。

男は、少年に殴り掛るが、少年は素早く男の背後に回りこむ。次の瞬間、その男は真後ろから打撃を食らい、床と熱い抱擁を交わしていた。

「覚えてろよ」

男は立ち上がると、振り返りもせず、すぐに立ち去つていった。

アレクが席に座ると、商人風の酔っ払いの男が、皿とジョッキを持つて、アレクの側に来た。

酒場には、大抵一人ぐらい、旅人好きの男がいる。一人旅の旅人を捕まえては、話をしたり、話を聞き、そして、奢つたり、奢られたりして、過ごす爺さんだ。

一人旅をしているアレクにとつては、貴重な情報源であり、一人旅の寂しさを紛らわしてくれる相手でもある。

「良くなってくれたな。あいつは、ああ見えて街の有力者の息子でね。街の人間は手が出しにくいんだ。ところで、山賊を退治したっていう剣士ってのは、あんたかい」

「そうですが」

「惜しかったな、もう少し早くくれば、領主様のドラゴン退治に連れて行つても貰えたかもしれないのにな」

「ニア山のドラゴンですか」

ニア山のドラゴンについての噂は道中でアレクも聞いた事がある。

「ニア山とはレオンの街から30キロ程はなれたところにある山で、何でも、2ヶ月ほど前から、ドラゴンが飛来して山中に住みつき始めたという話だ。

多くのドラゴンに関する話が、誇張した噂や何十年前もの話なの

に対して、ニートア山のドラゴンに関しては、目撃談も多い。非常に信憑性が高く、そのため、多くの冒険者がドラゴン退治を既に試みている。

が、今だ成功していない。

ドラゴンが強いためだ。

ニートア山のドラゴンは、龍騎士の使う飛竜とは異なり、人語を話、魔法すらも使う古代龍と言われている。古代龍は、強大な力を持ち、古代ローマの時代や、東方のある民族では、神として崇拜されいると聞く。

「なあ、兄ちゃん。ドラゴン見たことあるか

「ありませんが」

「そうか俺は、見たぞ。隣街からの帰り道の街道でな。翼を広げ大空を飛んでいて、20メートルはあつたな。そのドラゴンが退治されたとなれば、この街も賑やかになるな」

100年前、幸運を齎すといわれる竜が街に降り立つたというだけで観光名所となっている街もある。それ以上に、田舎での商人で賑わうだろう。

「ふーん、ドラゴンが何か悪いことでもしたんですか」

教会はドラゴンを悪魔の手先、もしくは悪魔として忌み嫌つているが、余程のことがない限り、退治などは行わない。

ドラゴンが強すぎるためだが。第一、ドラゴンは、人間社会にあまり実害がない。

ドラゴンは、一年中、ほとんど寝ている上に、人里はなれた山奥や洞窟の奥に居るため、人間と滅多に遭遇しない。腹をすかせたドラゴンが家畜を襲うという例を時たま聞いたことがあるが、それでも退治はしない。それに、ドラゴンが近くに住んでいるところは、家畜や作物の疫病が流行らないという話もある。そのため、ドラゴ

ンの存在は、恵みや災害をもたらす、嵐や雷と同じ自然災害のようなもので、『触らぬ神に祟りなし』『寝た子を起こすな』といったところだ。

興味本位の冒険者ならともかく、ドラゴン討伐などこつのは、非常に珍しいことである。

「別に何もしてないよ」

「それなのに何で」

「そりや、ドラゴンバスターの称号がほしいからだろ？ それにドラゴンの体 자체、信じられないくらい高く売れるしな」

確かに、ドラゴンの鱗から作った剣や鎧は、鋼より強く、遙かに高く取引されていると聞く。

戦争中の国にとつて、願つてもない話だらう。

「可哀相ですね」

「えつ？ 何が」

「ドラゴンがですよ。欲のために、殺されそうになるんですから」

「そりやそりだけどな。でも、教会はドラゴンを悪魔の手先つて言つて、忌み嫌つていいんだぞ」

「でも、ゲルドの人にとってはそうじやないはずです」

「ゲルドは異教徒だぞ。旅人だから知らないかもしれないが、ここでは、その手の話はタブーだ」

「ほつほつほつ、ドラゴンが可哀相か。旅の方、面白いこと言つたと豊かな髭を生やした老人が声をかけてきた。

「どうやら、旅の老人のようだ。

「わしの名前は、。」う見えて、賢者で通つておる

「ドラゴンは強い。心配せんでもいいぞ。それより領主様たちの心配をした方が良いの」

「大丈夫だよ。有名な剣士を何人も雇つたらしい。それに、魔道士

も雇つているとの話だ。シュー・ティイングスターに喧嘩を売るわけじゃないんだから、大丈夫だろ？」「

「さて、どうかな。あのドラゴンは、魔龍シュー・ティイングスターの親戚と聞くぞ」

古代の神々を震え上がらせたという魔龍、シュー・ティイングスター。少し歴史を知つていてるものなら誰もが知つていてる名前だ。人類の歴史において刃向かつた数多くの王国を滅ぼしたと呼ばれる伝説の魔龍。現在、西の端のブリタニア島の西部に住んでいると呼ばれている。

それにしても、ドラゴンに親戚関係なんでものがあるのだろうか？さすが、賢者という氣もするが、胡散臭さを感じる。

「そんな、不吉なこと言うなよ」と酔っ払いの商人。

「これは悪かった。お詫びに一杯おごらせてくれ」

「おっ、爺さん話しが判るな。さすが賢者だ」

酔っ払いの商人は、直ぐに機嫌を直した。

三人で酒を飲んでいると、突如、男が大慌てで、店の中に飛び込んだ。

「領主様の館が、ドラゴンに襲われているぞ」

それが何を意味しているか明白だ。

領主たちは、ドラゴンに負けたのだ。そして、そのドラゴンが報復に来たのだ。

店主が路地へと飛び出す。店の中に居たほぼ全員が、店の外に飛び出した。当然、アレクも飛び出した。

ただ、一人旅の自称賢者の老人だけが、静かに酒を飲んでいた。

闇夜の中、丘の上にある領主の館が燃えている。

その業火の光は、巨大なドラゴンの影を闇夜に浮かびあがらせ、街を夕焼けのように赤く染める。

『あんなものに喧嘩を売ったのか』

多くの人がドラゴンを童話や寓話、挿絵やタペストリーで知っているが、普通に生きている限り、ドラゴンなんて一生に一度生で見ることすらない。

ほとんどのフェスの人々ですら、ドラゴンを見たのは始めてだろう。多くの人にとつて日常に関係ない、もはや伝説の生き物だ。その伝説の魔獸が田の前に存在している。

「うわー。街はもう終わりだ」

「ドラゴンに戦いを挑むなんて無謀だつたんだ」

多くの人々が嘆き、その惨劇に絶望する。

「うわたえるな」

ドラゴンから街を守るために、衛兵や市民たちが家から武器を持ち寄つて、広場に集まる。

この時代、身分は役割の応じて、原則三つに分けられている。祈りを行う僧侶、戦う騎士、そして働く市民や農民である。国を守り民を守るのは、騎士の仕事である。しかし、街は、税金として納めるが、市民が自治を行つており、市民が街を守るために武器を持つて戦うのである。

ドラゴンが丘の上の領主の館から飛び立ち、ゆっくりと街に近づいてくる。

「ここちに来るぞ」

「逃げる」

ドラゴンが街の中心の広場に舞い降りてきた。  
真近で見ると、さらに大きく感じられる。

全高は、四階分はあるだらう。

トカゲが多くなったのとは、訳が違う。荒々しいながらも、神々  
しさすら感じる。

しかし、これでもドラゴン族の中では小さい部類に入るらしい。

「喉の逆鱗を狙え」

衛兵長が声を張り上げる。

逆鱗はただ単に触れられて不愉快な場所ではなく、その鱗の下に  
は、動脈があると言われている。ドラゴンの数少ない弱点だ。

「長弓」や「石弓」から矢が放たれる。角度がよければ突き刺さるが、そ  
の多くは硬い鱗に流されるか、弾かれてしまう。

一息で、数十軒が炎に包まれる。

「引け。地下に逃げろ」

衛兵長の指示に、兵士たちは近くの下水口から下水道に逃げ込む。

「下水道とか言つものに隠れてるつもりか」

ドラゴンは、下水口に口を近づけ、水道の中に火を吹き込んだ。  
断末魔の悲鳴が地下から湧き起る。

地下にに居る、何十人もの兵士が一瞬にして焼け死んだ。

「うわあ惨い」

路地から覗いていたアレクは、あまりの光景に目を背けた。

「君は戦わないのかい？冒険者なのに」と宿場にいた自称賢者の老人だ。

「戦いませんよ。冒険者だからって何でも戦つ訳じゃありませんよ」「戦わないのであれば、他の者のように逃げればよいだろ。それとも隙を見てドラゴンを倒して名をあげるつもりかな」

「そんなつもりありませんよ。それより、あなたこそ早く逃げたらどうですか」

「なぜかね。今こそ、この田でドラゴンを観察するまたとない機会じゃないかな」

賢者らしい、常人とは違う発想だ。

「お父さん、お兄ちゃん」と死体に抱きついて泣く子供。

そして、その子供は、近くの死体から槍を取ると、ドラゴンの前に飛び出した。

「あつ、バカ」

「みんなの仇だ。俺がおまえを倒してやる」

ドラゴンは、子供の存在に気が付くと、炎を吐くことなく、語りかけた。

「人間の命は短い、死を急ぐ必要はないだろ？ 今なら、見逃してやる。さつさと、逃げろ」

「うるさい。俺は男だ。逃げるものか」

「無意味な死を急ぐか……子供とは言え、覚悟を決めたのであればしようがない」

業火が放たれる。

が、飛び出しアレクが、間一髪で、子供を助ける。

そして、そのまま、子供を抱えながら、下水口に飛び込んだ

「愚かな」

ドラゴンは、水道の中に火を吹き込もうと、下水口に口を近づける。

『何?』

ドラゴンが見たのは、槍を構えるアレクの姿だった。

火炎が煮えたがっているドラゴンの口の中へ、アレクは槍を投げた。

槍<sup>じ</sup>ときでは、巨体のため致命傷にはならないが、ドラゴンは、仰け反り、魔力の発動が止まつた。

その事は、致命的なことであった。

火炎となつた魔力の一部が、発動が止まつたことにより、ドラゴンの体内に逆流を始めたのだ。

自らの炎により、体内から焼かれる苦痛。

悲鳴を上げようとしたが、喉をやられ声が出なかつた。ドラゴンは、痛みが憤怒に変わつた。

『おのれ！――己人間の分際で』

怒りに任せ、炎を吐きたいが、もはや、吐くことも出来ない。怒りが収まらないが、正直、立つてゐる事すらままならなかつた。

ドラゴンは、自らの業火に傷つき、崩れ落ちた。

アレクは、素早く下水口から飛び出ると、剣を抜き、ドラゴンの逆鱗に剣を構える。

数秒後、アレクは、剣を鞘に納めた。

「おい、倒したのか」

「そいつは、まだ生きているぞ。とどめを刺せ」と隠れいた街人が次々と声を上げる。

だが、アレクは、周囲の意見を氣にも留めなかつた。

「止めにしないか。俺は街の人間じやない、通りすがりの冒険者だ。あんたを倒す理由はない。もう、こんなに人を殺したんだ。いい加減、気が済んだらう。許してやつたらどうだ」と倒れているドラゴンに語りかける。

「何言つているだ、おまえ。こいつは街のみんなを殺したんだぞ」と街人のひとりが抗議した。

そして、次々とアレクを非難し罵倒し始めた。

しかし、アレクは何も答えなかつた。

そのうち、ドラゴンは静かに起き上がり始めた。

そして、自分の住みかの方を見ると、そのまま飛び去つた。

「やつぱり、倒した方が良かつたかな」

アレクは、頭上の星空を見上げながらつぶやいた。

その日のうちに、アレクは街を出た。厳密には、追い出されたのだが。

街の人たちは、ドラゴンが去り、自分たちが生き残つたことを喜ぶことよりも、ドラゴンに多くの家族や友人が殺されたにも関わらず、自分たちが復讐できなかつたことに不満を抱いていた。その感情が、結果的にドラゴンを追い返したアレクに向けられたのだ。そして、ドラゴンを倒さなかつたことを責められ、追い出されたのだ。

アレクは、空腹の腹を押えながら、英雄として、『馳走を食べている姿を思い浮かべた。

どうしたものかと考えながら、街道を歩いていると、背後から不

意に声がかかった。

「街を救った英雄が、こんなところで何をしているのかね」

振り向くと自称賢者の老人が居た。

「英雄じゃありませんよ。ドラゴンを倒さなかつたって責められて、街を追い出されてんですよ」

「そうか . . . 英雄になり損ねたな。ドラゴンスレイヤーの称号をもらえば、それだけで一生、食べていけただろつ」

「僕にドラゴンなんか倒せませんよ。確かに傷を負つていましたけど、ドラゴンは飛行できるだけの魔力と体力を持っていたわけですからね。傷を付けることはできたかもしませんけど . . . 僕も死んでました。そして、街の人も」

「そうかもしだんな。だが、ワシが見たところ、6・4でお主が有利じゃつたぞ」

「そうでしたか . . . でも、僕は賭けはしませんので」

「つまらない男だな。でも、賢明な判断じゃな」

「それにして . . . なんで、ドラゴンは素直に帰つてくれたんでしょう。殺そうと思えば、簡単に殺せたのに」

「ドラゴンの誇りと命は、人間が考えるより遙かに価値がある。それに、情けをかけた君を殺してみる、あやつは何百年間も仲間の間で笑いものになるぞ」

「そういうものなんですか」

アレクには、ドラゴンの思考や習慣はしらないので、自称賢者の言葉を信じるしかなかった。

「そうそう、君にプレゼントある。たる高名な方からの褒美じゃ」と背中に背負つていた麻袋を手渡す。

「ドラゴンを倒さなかつたのに?」

「倒さないからこそ、価値があることもあるさじやよ。良こから中を見てみる」

中をのぞくと、素人目にも判る見るからに素晴らしい宝石と一冊の本が入っていた。

「あいにく、現金はあまり持つていなくてな。その宝石を換金すれば、百万ゴールドにはなるだろ?」

「百万ゴールドと言えば、もう一生働かなくても済む金額だ。それを簡単に払う、高名な方とはいつたい誰だろ?」アレクは思つた。

また、アレクには宝石よりも一緒に本に关心があった。痛んで表紙はボロボロになつていて、元は革で製本されている本だ。この老人は何のために本を入れたんだろう。何か特別な本なのだろうか。本を取り出して、良く見てみた。

「宝石よりも、おんぼろの本に興味があるとは変わつた方だ」

表紙に古代語らしい文字が書かれているが、アレクには判らない。

「『知恵の書』と書かれているんじや」

開いても、白紙で何も書かれていない。

「何も書かれていませんよ」

「必要になれば判るよ」

「こんなに貰つていいんですか」

「構わんよ。ドラゴンの名前と命は、それだけ価値があるところだ」

「あなたは何者なんですか?」

「通りすがりの賢者だよ」

そう言つて、通りすがりの賢者は、街の方へと戻つて行つた。

その後、噂によると、フースの人々はドラゴンに再び戦いを挑み、街は灰になつたといつ。

(後書き)

ファイルを整理していたら、出てきたので、せっかくだから乗せてしました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7950z/>

ドラゴンセイバー～アレクの冒険

2011年12月25日16時52分発行